

## 【震災支援】

- (1) 「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト報告
- (2) その他の災害支援

(1) 「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト報告

## ボランティアセンター長補佐による総括

東日本大震災支援ボランティア活動の「広がり」と「深まり」:

2013年度「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト総括

はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災後、2011年度の本学のボランティアセンターの被災地支援活動「Do for Smile@ 東日本」が創成期であるとするならば、2012年度は発展期だったが、今後の課題はボランティア活動の質的な「広がり」と「深まり」である、と2012年度「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト総括で示した。質的な「広がり」の課題とは、具体的には、①個々の支援活動がばらばらにそれぞれに活動するのではなく、必要に応じて明学チームとして活動を統合発展するための広がり、②「支援する人」と「支援される人」との関係を固定化せず、被災地で出会った人々、また支援活動を共有する人々と学び合う、協働する内的な広がり、③これまでの支援活動を国際的に発信するなど、国際的な視野の広がり、に要約される。また「深まり」の課題とは、ボランティア活動の経験を通して気づいたこと、疑問に思ったことなど気づきの種を、分析したり、共有したり、さらに新しい視点や違った角度からの情報を収集したりしながら、さらなる行動を大学や社会という場で起こしてみる、という、体験を通じた学びの促進だった。

これらの課題に対して2013年度という創立150周年の年にどのように「Do for Smile@ 東日本」活動を進めてきたか。また東日本大震災から3年が経とうとし、震災の記憶が風化しつつあるとも指摘される中、ボランティアセンターおよび活動の主体である学生たちが、復興支援活動にどのように向き合ったのか。2012年の課題に対応するために企画された2013年度の「Do for Smile@ 東日本」は、明治学院大学創立150周年記念事業の助成を得て年間12回の特別講座およびワークショップ「ヘボン吉里吉里未来塾」事業を通して有機的な展開が可能となった。「Do for Smile@ 東日本」プロジェクトの3つの拠点、岩手県大槌町、岩手県陸前高田市、宮城県気仙沼市、そして2013年10月に発生した東京都伊豆大島でのボランティア活動はそれぞれ個々の活動報告を活動主体である学生の報告を含めた報告文章に譲り、本報告は「ヘボン吉里吉里未来塾」の実施を中心に2013年度「Do for Smile@ 東日本」を総括する。

## 復興支援活動の「広がり」と「深まり」

復興支援活動の「広がり」と質の「深まり」の重要性について、昨年度に認識されたことで、活動の「広がり」と「深まり」が促進された。促進されたと考えうる根拠は以下である。

<広がり>

### ①多様な学生の支援活動への参加

学生が本センターのサポートの下に企画運営した大槌町吉里吉里へのスタディツアー（6月実施）に

本学の留学生（ニュージーランド、オーストラリア、マレーシア、台湾）の他、聴覚障がいがある学生複数名が参加した。多様化した学生の受け入れによって学生間およびセンター内で新たなサポート体制が余儀なくされたが、結果、互いの学び合いが促進された。その後、スタディツアーに参加したニュージーランドの留学生はその後支援活動に参加した他、帰国前に英語による大槌町復興を伝える写真集を得意とするパソコン技術を駆使して制作した。この写真集は、被災地大槌町だけではなく、現地の人々の暮らしや本学のボランティア活動も紹介されており、本センターの国際化のためのツール開発に寄与することとなった。また聴覚障がいをもつ学生も、その後継続的に支援活動に関わっている。

## ②「Do for Smile@東日本」3プロジェクトのゆるやかな融合

「Do for Smile@東日本」プロジェクトでは継続的で主体的な学生の関わりが求められるために、岩手県大槌町吉里吉里、岩手県陸前高田市、宮城県気仙沼市での3プロジェクトはそれぞれがほぼ独立した活動として実施されていた。しかし「ヘボン吉里吉里未来塾」第2回の「アートセラピー」ワークショップや、第7回のプロジェクトの目的に即した進行管理（Project Cycle Management）の手法を学ぶPCM研修、第9回「グループファシリテーション」ワークショップへの参加や、それぞれの準備作業を含め、参加した3プロジェクトの学生間の風通しが良くなった。その結果、2014年3月には、3チームの学生たち合同で、互いの活動現場である被災地を巡る「Do for Others 合同スタディツアー」が企画されている。

## ③地域の高校生らとの連携促進

「ヘボン吉里吉里未来塾」第8回シンポジウム「震災後の社会をどのように生きるか」は、テーマから学生の発案で企画され、支援活動地域の岩手県立大槌高校や鹿島学園高校釜石キャンパス、吉里吉里小学校、そして明治学院大学横浜キャンパスの近隣地域の横浜隼人高校から生徒を招き、また一般にも公開して実施された。これまで「Do for Smile@東日本」プロジェクトでは、大槌町吉里吉里中学校で学習支援や吉里吉里小学校で子どもの「わんぱく広場」支援を行ってきた他、また被災地支援活動参加学生が横浜隼人高校でワールドカフェとして活動経験を共有するなどの活動実績があったために実現したものだった。基調講演や報告のあと「震災後の社会をどのように生きるか」をテーマに、支援する人・される人の関係を超えて、一般参加者、明学関係者らとともに震災を通じた自らの生き方を語りあえる場となった。

また、本学と大槌町と「ボランティア活動に関する協働連携協定」（2012年締結）の下に、2014年度より県立大槌高校からの推薦入学制度が適用される。本学のボランティア活動は大学と高校という教育機関の協働連携への寄与を可能としたことを付け加えたい。

## ④ローカルからグローバルな視点へ

2011年度、2012年度の「Do for Smile@東日本」プロジェクトは、それぞれの被災地での人々の支援ニーズに対応するローカルな視点を大事にしながら活動を進めてきた。2013年度は、これまでの経験を

国際的に発信する、留学生の参加を促す、などの作業を通して、学生の活動経験の相対化とグローバルな視点をもつことが促された。具体的には、「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト、吉里吉里地区での活動経験がある2名の学生がボランティア促進の国際組織 International Association for Volunteer Effort（ボランティア活動推進国際協議会）のマカオ大会のユースフォーラムで活動報告したほか、他国からの若者とボランティアに関する議論を深めた。その経験は帰国後、活動をともにする仲間たちに共有された。

また、前述の留学生の「Do for Smile@ 東日本」スタディツアー参加のほかに本センターは国際学部が主催したアメリカのカリフォルニア大学交換留学生と学生とのスタディツアーに協力し、留学生間および報告書執筆によって出身大学への学びの共有化がなされたことを付記したい。

さらに2014年2月には、日本同様地震大国でもあるトルコへの視察・ボランティアツアーを大学で実施、本センター長以下、「Do for Smile@ 東日本」プロジェクトの複数名が参加予定である。ローカルで考え、実践してきた経験を相対化し、グローバルな視点で応用していける契機となることが期待される。

<深まり>

本センターは、創立の理念“Do for Others”を体現する大学の一機関である。そのため支援活動を通じた学生の社会理解や自己理解を通じた人間性の滋養、専門的知識を習得し応用するなど学びのプロセス、つまり<深まり>を支援する役割をもつ。2013年度はこの役割に対して、「ヘボン吉里吉里未来塾」では、①主に大槌町吉里吉里地域の理解、②支援活動の質を深める専門的な知識（導入部分）の理解・習得、③プロジェクトをチームで行う際のスキルアップ、④震災後の社会に対する包括的な理解の4方向で講師を迎え、学びのプロセスの質の深化に寄与した。そのうえで⑤として付記したいのは、2012年度以降、本センタースタッフおよび支援活動参加学生らによる学内外関係者へのヒアリングである。次に①から⑤の<深まり>を列挙する。

①大槌町吉里吉里地域の理解：森林保全や100年後を見据えた復興事業を行うNPO法人吉里吉里国代表の芳賀正彦氏（第1回）、吉里吉里中学校元校長沼田義孝氏（第4回）、被災地の町づくり、人育てを目的とするNPO法人「おらが大槌夢広場」の田中正道氏（第4回）、吉里吉里の吉祥寺住職の高橋英悟氏（第5回）を迎えた。

②専門的知識の理解・習得：「大槌町におけるメンタルヘルスの現状と課題」鈴木満氏（第9回）、「福祉的ニーズを持つ被災者の支援と実態」として本学社会学部の岡本多喜子教授（第10回）、「被災地における文化の再生と支援者の役割」追手門学院大学の橋本裕之教授（第11回）、「3.11後の『ボランティア』論」法政大学の仁平典宏准教授を依頼した。

③スキルアップ：「アートセラピー」IsraAID（第2回）、「社会貢献活動から学ぶ」ポートランド州立大学クレス教授（第3回）、プロジェクト・サイクル・マネジメント研修（第7回）、「グループファシリテーション」IsraAID（第9回）と、活動国や地域を問わない国際的なレベルでの講義を学生に提供する

ことができた。

④震災後の社会に対する包括的な理解：御厨貴東大元教授の講演「災後の時代をどう生きるか」は東京オリンピック招致決定直後との時機でもあり、鋭い指摘や深い考察が聴衆に促された。

⑤学内外関係者へのヒアリング活動：ボランティア活動が自己満足に終わらず、活動内容の改善を目的として2012年度から開始された。2012年度は吉里吉里地区のキーパーソンおよび本学の学院長と学長のヒアリングを実施し、2013年度は参加学生の多くが所属する社会学部学部長へのヒアリングを行ない、支援活動と大学での学びの連関について意義深い示唆を得た。さらにヒアリングのほかにアンケート調査を、吉里吉里「学習支援」セクション学生を中心に吉里吉里中学関係者を対象に実施した。この調査に携わった学生は支援活動や調査活動から示唆を得て、「東日本大震災復興支援ボランティア活動に参加した学生の学び・変化」と題した卒論を執筆した。また当該学生は、教員採用試験にも合格した。この事例は、ボランティア活動が大学での学びと学生のキャリア開発を促進した例と言えるだろう。

## 結論と課題

2011年度以降、「Do for Smile@ 東日本」プロジェクトは、継続し、発展的に実践されてきたと言える。2013年は活動の質が、上述したように「広がり」と「深まり」が促進された。これらを可能とした要因は、内外の助成金の存在だけでなく、それを活用し、学生の成長を第一に考えてきめ細かく対応するスタッフ、そして支援活動に参加する学生たちの意欲や行動力、責任感に依るところが大きい。

しかし震災後3年目を迎える東日本大震災被災地支援活動の新たな課題も健在化してきた。第1に、遅々として進まない復興への苛立ちや、社会・人間関係の変化へのストレスの健在化により支援ニーズが多様化・複雑化していること、第2に、復興が進んでいないにもかかわらず社会の震災の記憶が風化しつつあること。それにより助成機会の減少、ボランティアを担う人の確保の困難から支援活動の規模の縮小が懸念される。4年で卒業していく大学生を対象とした活動は常に新しく、そして継続的に活動する学生が必要とされるため、社会の震災記憶の風化への対策は喫緊の課題である。

こうした課題に対応していくために、本センターの事業を含め、学生たちの活動のアセスメントを実施し、投入（インプット）と成果（アウトプット）の確認、学内および地域（大学周辺地域と対象活動地域）、社会からの評価を確認した上で、多言語による情報公開と国内外の大学や組織とのネットワーク化が被災地復興支援活動の存在意義を明確にする一助となるだろう。また、こうしたアセスメントを実施することで、学生の成長の軌跡を認識できるだけでなく、次なる災害の被災地支援への教訓を導いて備えが可能となる。本センターは、被災地復興支援活動以外にも、主要な通常のボランティア活動や社会事業が多様化しながら展開している。こうした通常のボランティア活動支援に加えて、突発的で臨機応変な対応が必要な被災地支援のバランスをどのようにとるのか。発展拡大の一途であった「Do for Smile@ 東日本」プロジェクトは熟考の時機に入った。

（齋藤）

## 「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム～

2011年4月から始まったこのプログラムは、これまで305日、71ターム、のべ600人以上の学生が岩手県大槌町で復興支援に取り組んだ。震災直後の「緊急支援」から始まり、「地域に寄り添った活動」を目指しながら、大きく発展した昨年から、現地の状況の変化に伴い、活動の方向性を模索する年となった。夏から秋にかけて、地域の方へのヒアリングや吉里吉里小学校の保護者へのアンケートを行うなど、大槌の現状や地域のニーズを探りながら自分たちの活動を振り返る取り組みを行った。そのような過程の中で、復興支援活動を通じて知った「被災地」で起こる問題を「社会」の問題として捉えるようになった学生が増えた。大槌・吉里吉里と向き合う中で、自身の社会における役割、自分たちが生きる社会と向き合い始めた私たちは、12月に、シンポジウム「震災後の社会をどのように生きるか」を開催するに至った。関東の学生に限らず、大槌の高校生や小学生も登壇し、さまざまな立場の人とともに震災後の社会をどのように生きるか話し合う場を作ることができた。対大槌から対社会へと視点が広がったことは、大きな進歩だと言える。以下は各プロジェクトの報告である。

<p>わんぱく広場 私たちは、震災により安全に遊ぶ場所を奪われた子ども達に遊びの場を提供する活動をしている。震災後時間が経過し、子ども達は生活環境の変化などでストレスを抱えているため、遊びは子どもにとって大切な時間である。今年度は親世代が企画した行事に子ども達とともに参加するという新たな活動も生まれた。さらに、保護者へのアンケートも実施し、自分たちの活動がより良いものとなるよう試行錯誤を続けている。来年度は、また新たなわんぱく広場を展開していきたい。足を運ぶたびに「また来てね。」と言ってくれる子ども達に、私たちは会いにいき続けたい。</p> <p style="text-align: right;">(政治学科2年 渡辺)</p>	<p>学習支援活動 今年度、私たちは吉里吉里中学校の生徒を対象に、授業サポートや学習会の手伝いに留まらず、中学生の将来に向けて、視野を広げる手助けをする事を目的に活動を行ってきた。具体的には9月には、先生方からのリクエストにより、学生が大学の様子や今までの経験を話したり、中学生の悩みや質問に応えたりする等の交流を行った。これは中学生と年齢の近い大学生の私たちからこそできる働きかけであると考えている。来年度は、再び中学生が修学旅行で明治学院大学を来訪する事が予定されている。今まで築いてきた吉里吉里中学校との関係を大切に、今後も自己の可能性の広がりを見出す事ができるような活動をしていきたい。</p> <p style="text-align: right;">(心理学科2年 秋庭)</p>
<p>仮設住宅支援 震災によって変化してしまったコミュニティのかけ橋となることを目的とし、お茶っこサロンのような地域の方が気軽に集まり、交流できる場作りを主な活動としている。こうして地域の人どうしがつながることで、少しでも復興の後押しになるのではないかと思う。この活動は地域の方の生活に関わるものなので、現地に寄り添い、ニーズに沿った活動を行えるよう地域の方の声を聞くことを大切にしている。今後は、今まで仮設住宅に住まわれていた方が災害復</p>	<p>復活の薪プロジェクト 私たちの活動は、林業から地域復興に携わる「NPO法人吉里吉里国」のサポートである。昨年は吉里吉里国での学びを現地と関東の両方に広めるため、「人と自然の懸け橋になる」と目標を掲げ活動した。今年度はその理念の下、仮設住宅支援と合同で地元の方を対象に吉里吉里国の木材を用いたワークショップを行った。学生が懸け橋となり、吉里吉里国の存在を地元を広め、その活動がより地域に支えられたものとなることを目指したものである。また</p>

<p>興公営住宅に移ったことで大きく変化すると思われるニーズに応え、今まで通り現地に寄り添った活動をしていきたい。そして、これまでつながりを構築してきた、お年寄りだけでなく、子どもや若い世代とも関わりを持ちたいと考えている。そうして学生が媒体となり、地域をひとつにまとめられるような活動をしていきたい。</p> <p>(国際学科2年 井上)</p>	<p>今年度は吉里吉里国の体制の拡充に伴い、より間接的な支援に内容がシフトした。今後は地域と吉里吉里国の間に入るとともに、活動で得た学びを広く社会に還元していくことが必要であると感じている。学生として地域にも、そして広く社会にも貢献できるよう、掲げた理念の下活動を行っていきたい。</p> <p>(英文学科3年 瀬川)</p>
<p>吉里吉里の言葉・文化のアーカイブ活動 文化の記録を通して、地域の良さを再確認し、復興の原動力にしてもらうことを目的としている。文化とはその地域の人をつなぐものであると考え、そこに焦点を当てることで復興の背中の後押しすることを目的とし、活動してきた。今年度は引き続き吉里吉里の方言を記録する活動をし、さらに地域の祭りに参加した。祭りの参加では地域の方々に寄り添うこと、現地の方々の気持ちを知り、今後の活動に活かすことを目指し、祭りに参加した。老若男女集まる祭りに参加した結果、さまざまな人とつながることができ、また、普段の活動では知ることのできない祭り(文化)や復興への生の声を「祭り」という場を通してきくことができた。これらの人脈やニーズを生かして今後の活動をよりよく展開していきたい。</p> <p>(社会福祉学科1年 森泉)</p>	<p>復興の歩みのアーカイブ活動 この活動では、吉里吉里の今を未来の吉里吉里人に残すこと、地域以外の方々にも吉里吉里の魅力を伝えることを目的として、「吉里吉里から～今伝えたいこと」という冊子を制作している。第2号では、①社会に伝える、震災の風化を防止する、②冊子を通して全国に震災の当事者意識を持ってもらう、③冊子を通して吉里吉里人に誇りを持ってもらい復興の原動力としてもらう、④吉里吉里の今を未来に伝える、の4つを目的とし、吉里吉里の祭りや、過去から伝わる震災の教訓を中心にまとめた。完成した冊子を現地の方々にお見せしたところ、「よくできている」「よくここまでまとめた」等、お褒めの言葉をたくさんいただき、増刷も決定した。だが、計画性の不足という課題もある。今後もこの課題を改善し、より吉里吉里の魅力を伝えられる冊子を制作していきたい。</p> <p>(経済学科2年 岩田)</p>
<p>スタディツアー この企画は「復興に向けて前進している人たちと出会うことで、大槌・吉里吉里や、この復興支援プロジェクトに興味を持ってもらい、復興の後押しとになりたい」という思いから生まれた。今年度は「出会い」というテーマのもと6月に実施した。大槌・吉里吉里に生きる人たちとの出会いと対話、現地と事後に行われたディスカッションを通して、自分の生き方、自分の生きる社会を考え、見つめ直した。今年度は4名の留学生(台湾、マレーシアからの正規留学生、ニュージーランド、オーストラリアからのISP交換留学生)が参加し、さらに2名の聴覚障がい学生も加わった。この活動は2012年度より、これまでに3回行われたが、スタディツアーをきっかけに、継続的にDo for Smileの各プロジェクトへ継続して参加している学生は多い。</p> <p>(政治学科2年 荻原)</p>	

昨年に引き続き大槌・吉里吉里との関係性を大切にしながら活動してきたが、多様化するニーズにどのように応えていくのかという課題がある。まもなく3年目を迎えるこのプロジェクトは、今後どのように地域と関わっていくのか、より良い支援とは何か突きつけられ、変革を求められている。私たちは自分たちの活動を見直すために、阪神淡路大震災や能登半島沖地震の復興支援に関わる大学など、他地域の支援のあり方を学んでいる。こうした視点も生かし、柔軟に動いていきたい。

(社会学部社会学科2年 安部薫)

## 明治学院創立 150 周年記念事業「ヘボン吉里吉里未来塾」

### ～被災地が抱える課題解決と地域再生を担う人づくり

ボランティアセンターでは、東日本大震災直後から岩手県大槌町、陸前高田市、宮城県気仙沼市等の被災地での復興支援活動に取り組んできた。中でも岩手県大槌町とは、2012年3月に協定を締結し、今後大学として継続して大槌町を支援することや復興支援活動が学生の学びの機会としても高められることが確認された。こうした背景から、被災地が抱える課題解決と地域再生のために取り組む学生を育成することで、創設者ヘボンが生涯貫いた精神“Do for Others”を受け継ぐ共生社会の担い手を育成することを目指し、明治学院創立 150 周年事業として「ヘボン吉里吉里未来塾」を企画した。ここでは吉里吉里の地域研究（政治、社会、文化、地理など）や復興や防災・減災に関する実践・研究、ボランティア学、社会福祉、心理、社会調査方法などのインプット（事前学習）と事後の振り返り（リフレクション）を体系化することで学生の学びが構造化されることをねらいとした。この未来塾では、インプットとして下記の連続講座（表1）を開催し、さらにアウトプットとして、シンポジウムや活動報告会にて、「復興支援を通じた学び」や「震災後の社会でどのように生きるか」等をテーマにした発表をおこなった。

「ヘボン吉里吉里未来塾」講座一覧（2014年2月以後開催分は予定）〔表1〕

	日程	テーマ	講師
第1回	4月29日	森から創る100年後の故郷	芳賀正彦(NPO法人吉里吉里国代表)
第2回	5月18日	ワークショップ「アートセラピー」	イスラエル国際人道援助フォーラム(IsraAid)
第3回	5月24日	「社会貢献活動から学ぶ」とはどういうことか ～Learning through Serving～	Christine M. Cress (アメリカ・ポートランド州立大学教授)
第4回	6月23日	東日本大震災を乗り越え、自ら命を守る力を育てるために	沼田義孝(吉里吉里中学校前校長)
	6月24日	被災当事者からみた、東日本大震災	田中正道(おらが大槌夢広場)
第5回	8月5日	3月11日 吉里吉里のあのとき、そして今	高橋英悟(大槌町吉里吉里 吉祥寺住職)
第6回	9月12日	災後の時代をどう生きるか	御厨貴(東京大学客員教授、 元東日本大震災復興構想会議議長代理)
第7回	10月23日	PCM(プロジェクト・サイクル・マネジメント)研修	大迫正弘ほか(PCM東京)
第8回	12月1日	シンポジウム「震災後の社会をどのように生きるか」	猪瀬浩平(明治学院大学教養教育センター准教授) 山形守平(岩手県立大槌高等学校校長) 村上徹也(日本福祉大学社会福祉学部教授) 金澤茜、神田健翔(岩手県立大槌高等学校生徒) 関谷萌、吉田蘭(鹿島学園高等学校釜石キャンパス) 芳賀勝(大槌町立吉里吉里小学校6年)
第9回	1月31日	ワークショップ「グループファシリテーション」	イスラエル国際人道援助フォーラム(IsraAid)
		大槌町におけるメンタルヘルス支援の現状と課題	鈴木満(外務省メンタルヘルス対策上席専門官、岩手医科大学神経精神科学講座客員准教授、NPO法人心の架け橋いわて代表)
第10回	2月28日	福祉的ニーズを持つ被災者の支援の実態と課題	岡本多喜子(明治学院大学社会学部教授)
第11回	3月26日	被災地における文化の再生と支援者の役割	橋本 裕之(追手門学院大学社会学部教授)
第12回	3月28日	3.11後の「ボランティア」論－災間の時代を生きる	仁平典宏(法政大学社会学部准教授)

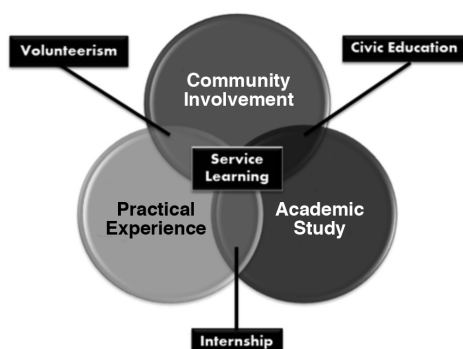
## 【シンポジウム「震災後の社会をどのように生きるか」】

東日本大震災発生後、私たちは復興支援や地域再生に関わり、震災に向き合ってきたが、それは同時に「震災後の社会をどのように生きるか」ということを私たちに問いかけるものだった。シンポジウムでは、震災の経験や復興の過程から、私たちは何を学び、それを社会における生き方にどのようにつなげていくかについて深めることをねらいとして開催した。当日は大学生や大槌の高校生、小学生などの「若者」がまず、今後どのような生き方をしていきたいかを「災後」を軸に発表し、その後全体でグループディスカッションを行った。当日は上記のゲストに加えて、横浜の高校生、明学生をはじめとした大学生、高校や大学の教職員など、多様な立場の方が150名以上集まり、活発に議論をした。「震災後の社会をどのように生きるか」という共通のテーマで、支援する立場、被災した立場を越えて、ともに考え議論できたことは、本シンポジウムの成果と言える。一般来場者の人数の多さからも、このテーマに関する関心の高さがうかがえた。

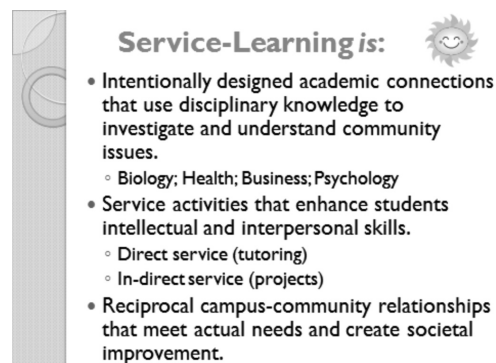
## 【『社会貢献から学ぶ』とはどういうことか～ Learning through Serving】

大学における学びを社会貢献活動に生かすこと、さらにフィールドでの経験や問題意識をキャンパスに持ちかえり、その考察から学びを深めていくこと、その循環的な学びがサービス・ラーニングである。「Do for Smile @東日本」大槌・吉里吉里復興支援プログラムでは、復興支援活動と学びの循環（PDS Aサイクル）を構築して取り組んできた。この取り組みの意義と課題を掘り下げるために、サービス・ラーニングの先進校であるアメリカ・ポートランド州立大学のクレス教授を招いて「『社会貢献から学ぶ』とはどういうことか～ Learning through Serving」というテーマでの講演会が開催された。当日は全国から大学やNPO関係者など、100名近くの方が来場した。講演に先立ち、ボランティアセンターのプログラム参加学生からは、学生がおこなう社会貢献活動からの学びについて、それぞれ「What I learned through the Internship Program at YOKE」「Learning through Volunteer in Tohoku」というテーマで発表した。会場から、「当初はプロジェクトに周縁的に参加する立場であった学生が、どのようなきっかけで、プロジェクトに主体的に関わるようになり、よりよいプロジェクトのために改善していこうという意識が芽生えるようになったのか」という質問が飛び交い、活発な議論が展開された。

クレス氏は、まず、サービス・ラーニングとは何かという定義を説明し（図1、図2）



〔図1〕



〔図2〕

さらに「サービス・ラーニングは、批判的な思考、問題解決力、コミュニケーション能力、リーダーシップ力、市民としての姿勢、感情知性、ライティング力などの能力を向上させることができることが、実証的な研究から明らかになっている」とその教育における意味について強調していた。

#### 【震災の経験を国際社会に伝える】

I A V E (International Association of Volunteer Effort) 日本支部理事長が、本センターに訪問したことがきっかけになり、I A V E アジア・太平洋大会(中華人民共和国マカオ特別行政区にて)での発表依頼を受け、参加学生及びセンター教職員が出席した。学生(国際学科2年の井上綾乃、若松健太)は、ユースフォーラムにて“The Role of Student in Volunteer for Reconstruction”というテーマで発表した。アジア太平洋からの若者100人以上を前に、東日本大震災の被災地が抱える課題や学生ボランティアの役割について訴えた。翌日には、齋藤百合子ボランティアセンター長補佐及びコーディネーター(市川享子)が、“The disaster and volunteerism Meiji Gakuin University (MGU) : Do for Smile @East Japan Project”というタイトルで、シンポジウムに登壇した。登壇者及び来場者は、フィリピンやタイ(水害)、オーストラリア(山火事)、中国や台湾、NZ(地震)など、それぞれ深刻な災害を経験しているだけに、参加者たちの関心が高く、発表に対して多くの質問や反響があった。最終日には、コーディネーター(市川享子)が、“The challenge of Service-Learning in Meiji Gakuin University”というタイトルで、復興支援活動と学びの構造化及びその課題について発表した。

センター設立以来初、明学生による社会貢献活動の実践と学びに関する海外発表であったが、参加学生は「各国のユースが自国のことだけではなく、途上国における開発や人権問題にも広く関心をもっていったことに刺激を受けた」と語り、日本国内の被災地で培ってきた問題意識を海外にまで広げることができたことも成果であった。また、センターにとっては、海外の国々と将来におけるプログラム展開の可能性についての話も進み、センターのネットワーク拡大につながった。

こうした海外での発表の一方、本学に留学した学生による海外への発信もあった。大槌復興支援活動に継続的に参加した、ニュージーランドのヴィクトリア大学からの交換留学生は、“Otsuchi”というフォトエッセイを作成し、震災に見舞われながらも、前向きに力強く生きる大槌・吉里吉里の人々の様子を伝えた。震災への風化が懸念されるなか、ボランティアセンターと留学生のコラボレーションにより、震災の記憶を国際社会に伝える機会が作られた。

#### 【まとめ】

このへボン吉里吉里未来塾では、東日本大震災の復興と地域再生とテーマに23名の講師が登壇し、また16名の学生が、復興支援活動からの学び、今後の生き方へのつながりについてシンポジウム等で発表する機会を得た。震災を受けた地域における実践活動と大学キャンパスでのインプットとアウトプットが、学生の学びを豊かにして、未来を切り開く礎になってくれることを願っている。(市川)

## 「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～明学・気仙沼復興支援プログラム～ 気仙沼大島復興支援プログラム

### 【概要】

「大島で学び、それを伝え、大島の地域活性化を支援する」を活動目標とし、2月から10月にかけて8回、のべ79名の学生を派遣して支援活動を行った。

8月には本プログラム初となるスタディツアーを開催し、気仙沼大島の方々のご協力のもと、25名の学生が現地で震災と復興について考えを深めた。

11月には明治学院大学の文化祭、白金祭にて他震災復興プログラムとともに展示と気仙沼大島の名産品を販売して、揚げあんぱんや椿油、ゆずポン酢などを4万2400円売り上げた。12月は戸塚駅西口商店街の「区民市」に出店し、こちらでも揚げあんぱんと椿油を販売し気仙沼をPRした。

### 【現地活動内容】

漁業・農業支援として牡蠣の養殖作業、わかめの収穫作業、NPO法人椿の島21世紀プロジェクトのもとで大島名産の椿の庭園造り、ゆず農家のゆず選別作業の手伝いを行ってきた。こういった作業を通して気仙沼大島の方々との交流を深められた。

気仙沼市立大島中学校とは部活動の交流試合を行ってきた。6月の授業参観の際には保護者の方と一緒にカレー作りをし、中学生や保護者の方、先生といただいた。

また、初めて現地を訪れる学生に向けて、気仙沼大島を知ってもらうために音声ガイドサービスを用いて大島を散策した。昔から津波がこの地を襲っていたことを表す「導き地蔵」という民話や震災当時山火事が起こった亀山でまず被災地を学び、活動を行っている。

その他、気仙沼大島観光協会のパネル展示の設営、気仙沼大島の敬老会の会場設営、大島神社秋季例大祭神輿渡御祭参加、仮設住宅の住民の方との交流など、大島全体の方々と交流を行ってきた。



亀山の頂上から望む景色



大島神社のお神輿担ぎの様子

## 【スタディツアー】

8月20～22日にかけてスタディツアーを行った。「大島を知る」「大島を楽しむ」「大島でボランティアをする」を3日間それぞれのテーマとし、漁業農業の盛んな地域として、また観光地として、そして被災地としての大島を学んだ。

「大島を知る」のテーマでは語り部会を現地の方2人に依頼し、一人からは今までの人生や気仙沼大島に伝わる民話を教えていただいた。もう一人の方は机いっぱいの震災当時の傷跡深い写真を見せてくださり、ご自身の息子さんが九死に一生を得たお話をしてくださった。そして「奇跡の人になりなさい」と私たちに語りかけてくださった。どの話も私たちの将来を考えさせられるものだった。

「大島を楽しむ」のテーマでは小田の浜の海岸で海岸清掃をしたのち、観光客とともに美しいビーチを楽しんだ。小田の浜は海水浴場百選の全国第2位に選ばれた浜である。大島の人にとって、海は命のみなもとである。夏になればこうして海を満喫することもできるが、海が奪ったことやもの、自然の恐さも忘れてはいけなさと、改めて感じた。

最終日のテーマ、「大島でボランティアをする」では、漁業支援としてホタテの耳つり作業の手伝いをした。小田の浜の近くで沖合からとられたホタテの表面を削り、ロープをつなぐことでホタテが育ちやすくなるため、ロープに結ぶ作業をした。ホタテの養殖という貴重な経験を通して現地の方と交流ができたことも、気仙沼大島の方とのつながりを深めることにつながったと思う。

約一年間活動を継続して現地の方とのつながりを強めたことによって成功したスタディツアーだったと言える。毎晩行ったミーティングでは学生一人ひとりが復興に向けた想いを話し合い、充実した3日間となった。



小田の浜清掃作業の様子



語り部会の様子

(学生メンバー 文学部英文学科2年 榎田知尋)

## 「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～明学・気仙沼復興支援プログラム～ 気仙沼唐桑復興支援プログラム

### 【概要】

この活動では約30名の大学生が全国から集まり、民宿をお借りして炊事や掃除などを協力し合いながら5日間の共同生活を送った。

明治学院大学からは第4クール(8/26～8/30)、第5クール(9/2～9/6)合わせて10名が参加した。主な活動は古道整備、漁業支援(牡蠣の養殖、わかめ漁業)であった。空き時間には三陸復興国立公園や杉の下地区、今では撤去された共徳丸などを視察した。

### 【活動内容】

漁業支援では津波の被害を甚大に受けた牡蠣の養殖場を訪れた。仮設住宅が建っていたが、震災で家や船はほとんど流されてしまったという。そこでは牡蠣のタネ作りやホタテの網作りをお手伝いさせていただいた。震災の影響で出荷状況が悪く、出荷できる状態の牡蠣が2年分もまだ海に眠っているそうだ。わかめ漁業では漁で使う網の作成から袋詰めまで手伝わせていただいた。すべて手作業で伝統的な作業が受け継がれていた。復興が進み、震災前と変わらぬくらいの収穫ができているにもかかわらず、販売する場所がないと困っていた。震災から2年半経っていたが、まだまだ課題が残っていることを痛感した。

### 【感想】

実際に被災地に訪れ自分の目で見て、直接関わることで被害の大きさや課題の多さ、心の傷の大きさなどを痛感した。現地の方は傷ついている様子を見せず、私たちボランティアにとっても親切に接して下さったが、大切な人を失った経験があるからこそ、人の大切さを知り、絆を大事に接して下さったのかもしれない。震災から2年半が経ち、復興も進んでいるが、課題はまだたくさん残っている。その時に応じた支援を継続していく必要があると思った。



わかめ漁業作業の様子



牡蠣の養殖場での集合写真

(社会学部社会福祉学科3年 竹中宏羽)

## 「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～明学・気仙沼復興支援プログラム～

### 気仙沼復興支援プログラム総括

2011年の夏休みに東北学院大学の呼びかけにこたえる形で「大学間連携ボランティアネットワーク」による気仙沼市唐桑地区を拠点とした漁業支援・美術館における文化財再生活動等に参加したことをきっかけに本学独自の活動が発展的に始まった。

4月、「椿の島21世紀プロジェクト」が展開する椿園で植樹祭が行われた。前月の活動で現地スタッフとともに花壇を作った。一年で一番厳しい季節のなかで行った花壇に土を運び耕す作業は、初めての体験で見よう見まねであったが、暖くなるにつれて花を付け、観光スポットでの活動は実を結ぶものとなった。

昨年に引き続き参加した大島中学校での授業参観では、お母様とともにお昼に食べるカレーライスを作った。この活動に参加することで、一家族という小さな関係ではなく、大島全体が大家族のような関係で生活しているということを実感する。夏休みの活動では夏祭りに参加し、伝統のある装束を身に付け島内を練り歩き、秋には地域の運動会にもボランティアとしてはもちろんのこと、競技者としても参加した。授業参観も含めていずれも島を挙げての行事であるが、特に祭りのような神聖な行事にも島の方々にそこまで受け入れてくださったことが、私たちの活動を認めてくださっている証でもある。

夏の活動では初参加の学生に向けたガイドブックを作成し、夏までの活動を「活動報告書」という冊子にまとめる作業もキャンパス内で行った。いずれも学生のみで作られたものであるが、ポイントをしっかりと押さえた上出来な印刷物であった。

はじめに記した「大学間連携ボランティアネットワーク」では、今年度も夏期に唐桑地区を拠点に古道・遊歩道整備、漁業支援活動を複数の大学とともに行ない、本学からは2クールに合計10名の学生を派遣した。11月には東北学院大学でこれまでの活動のふりかえりと今後の展望を見据えたネットワーク実務者会議が開催され、東日本大震災だけでなく、伊豆大島やフィリピンで見舞われた台風災害を見据えた議論がなされた。さらにネットワーク拡充に伴う事務の当番制の議論もなされた。

ここまで振り返った気仙沼大島での支援活動は、震災後3年を経て安定した基盤を作ることができたと思われる。これはひとえに継続して活動に参加した学生の努力の賜物であり、当面の活動については学生主導で組み立てられる域に達している。しかし学生は時期が来れば卒業する。当報告書が完成する3月にもこのプログラムから複数の学生が巣立って行く。彼らは一年目の活動を支えた人材である。学生の参加人数は着実に増えているものの、これからの活動の核になる学生は？と考えたとき、筆者からは、集団を引っ張って行く人材が見当たらず、非常に脆弱であると感じられるのである。これは気仙沼の活動だけに言えることではないのだが、学生主導で継続できるのか、ボランティアセンター主導に戻るのか、分岐点に差し掛かっていると同時に我々の力量が問われるかもしれない。 (波多野)

## 「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～陸前高田復興支援プログラム～

### かわいい子には旅をさせよ

2012年2月、陸前高田で行われた復興に向けてのワークショップに参加した学生が、現地の方の「陸前高田を忘れないでほしい」「子ども達の走り回っている姿を見たい」という声を聞き、それに応えるべく、昨年度「かわいい子には旅をさせよ」を実施した。「かわいい子には旅をさせよ」は、夏休みに関東の子ども達を陸前高田へ連れて行くスタディツアーのことである。昨年度の夏に続き、今年度は8月5日～8日にツアーを実施した。参加者は、昨年度よりも6名多い30名だった。学生10名で引率し、東日本大震災の際に津波で大きな被害を受けた海岸沿いを訪問したり、陸前高田や大船渡に住む方のお宅に民泊させていただいたりした。また、伝統ある「けんか七夕まつり」にも参加できた。私は今回のツアーが初めての参加だったので、準備段階では不安でいっぱいだった。しかし実際にツアーを行って子ども達や保護者の方から「良かった」と言ってもらえて本当に良かったと思う。しかし、感じた問題点もあった。ここではあえて課題について振り返りたい。

はじめに、準備段階のタイムマネジメントだ。2013年3月頃から、「ツアーの内容をどうするか」「どうして民泊をするのか」「まつりに参加する意義は何か」などについて、メンバーそれぞれのこだわりをぶつけながら議論した。ただ、意思決定まで時間をかけ過ぎてしまった。課題としては、ある程度話したらあとは担当者の決定に任せるなどの、作業のメリハリをつけることだろう。

次にツアー中だが、1つめは、子ども達の「お手本」になることの大切さだ。挨拶や、食事の際の基本的なマナー、靴はそろえるなど、我々は小学生の手本になるべき立場にいたにも関わらず、ツアー行程をこなすことに必死になってしまい、余裕がなかった。

2つめは、子ども達や陸前高田の人々にこのツアーの意図を伝える難しさだ。3泊のうちの2泊は、民泊をしたが、温泉に連れて行ってもらったり、ごちそうをいただいたりと、ご厚意に甘えてしまった。また、子ども達と仲良くなろうとしすぎて、修学旅行のような雰囲気になっていたかもしれない。そのこともあり、ある民泊先のお母さんに「私たちがボランティアをしているみたいね」と言われてしまった。この言葉は我々の心に大変響き、我々の活動の意味を、ツアー後、時間をかけて話し合った。

我々は、子ども達が、東日本大震災による甚大な被害から力強く復興しようとしている陸前高田の人々とともにボランティアや防災教育などの活動をすることで、陸前高田の人々の強さを学び、大きく成長してほしいと願っている。東日本大震災から3年以上経過した今、人々が陸前高田を忘れないように、これからも我々は積極的に活動を続けていきたいと考えている。

(学生メンバー 心理学部心理学科2年 村瀬瑠美)

## 「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～陸前高田復興支援プログラム～ 陸前高田スタディツアー

今年度の新しい試みとして、主に1年生を対象に、陸前高田へのスタディツアーを実施した。学生13名の応募があり、学生メンバー5名とともに、2013年12月6日～9日に陸前高田を訪問した。13名にとっては、初めての陸前高田訪問となった。

このツアーの目的は、東日大震災から約2年9ヶ月が経った陸前高田の現状を知り、そこで生きる人々を知ることで参加学生に「力になりたい」と思ってもらおうということであった。

ツアーの内容は、陸前高田市の観光物産協会副会長で、夏の「かわいい子には旅をさせよ」でもお世話になった實吉義正さんの案内による被災地見学、仮設住宅「長洞元気村」訪問、陸前高田の復興サポートステーションのコーディネートで行った遺留品捜査のボランティア活動、そしてワークショップなどだ。ワークショップでは、「かわいい子には旅をさせよ」でもお世話になっている陸前高田ドライビングスクールの田村満社長、大学生などとともに市内広田町で復興に取り組むNPO「SET」の白井健一さん、そして、現在市内に滞在している学生メンバーの富原祐子さんを招いた。

たとえば、實吉さんの案内で実際に現地に行き、震災前の写真を見せていただきながら今の様子を自分たちの目で確かめたことで、その場の様子や雰囲気を知ることができた。長洞元気村の村上誠二さんには、仮設住宅とは何か、長洞地区が東日本大震災を経験したことでどんなことが起こったのか、どのようにして助け合って生きているのかなど、丁寧に教えて頂いた。ワークショップでは、3人のお話をうかがった後、明治学院大学の学生ができることについて、グループに分かれて話し合った。すべての活動において、参加した学生も熱心にお話を聞き、メモを取ったり、積極的に質問したりしていた。

ワークショップでは、「伝え続ける」ことが重要だと考える人と、「忘れてしまいたい」と考える人が現地にいる状況で、復興やその先のより良い東北、日本にどう繋げられるか、そこで学生ができることは何か考えるきっかけとなったと思う。バスの出発時間まで、普段からお世話になっている復興食堂「マイウス」の森谷陽樹さんのご厚意で、スペースをお借りして、話し合いを続けた。

このスタディツアーの後、ツアーに参加した1年生と2年生各1名ずつが、新たに陸前高田チームに加わってくれたことは、ツアーの成果の1つだと思う。これから、新しい仲間たちとともに、次の活動を考えていきたい。

(学生メンバー 国際学部国際学科2年 茂木里穂)

## 「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～陸前高田復興支援プログラム～

### 陸前高田復興支援プログラム総括

#### 【かわいい子には旅をさせよ 2013年夏 in 陸前高田】

なつかしい未来創造株式会社および陸前高田ドライビングスクールの代表取締役社長である田村満氏との出会いから2012年8月に実施したのが「かわいい子には旅をさせよ」（通称「かわ旅」）だ。今年度も、前回同様、被災地見学や、ホームステイ、ボランティア活動などを行った。

今回の「かわ旅」の参加対象は、基本は前回と同様「小学4～6年生」としながらも、前年度に参加した小学6年生（現・中学1年生）および、小学4～6年生のきょうだいの中学生は参加可能とした。「陸前高田を忘れない」というかわ旅の趣旨のひとつを考えたとき、昨年の参加者が陸前高田に「帰る」機会を提供したいという学生の思いを実現したものだ。また、中学生のきょうだいがいる小学生の参加のしやすさも考えた。

今年度は、「被災地としての陸前高田」だけでなく、豊かな文化と歴史がある陸前高田の一面も参加者に見てもらいたかった。そこで、地元の方々のご厚意で、陸前高田で8月7日に開かれる「うごく七夕」「けんか七夕」の2つのまつりのうち、気仙町で開催されるけんか七夕で、山車行列に参加させていただいた。このまつりは、900年の歴史があり、気仙大工の技術で作られた山車どうしをぶつけあわせて「けんか」をさせる。東日本大震災の津波で、1基を残し山車が被害を受けてけんかができなかったが、1基が寄付され復活した。この日にあわせて里帰りした方も多く、けんか七夕の迫力と熱気と同時に、気仙町の皆さんが大切にしてきた伝統に触れることができた。



「かわ旅」の実施にあたっては、今回も、一般社団法人ソーシャルビジネス・ネットワーク（SBN）、なつかしい未来創造株式会社、株式会社エイチ・アイ・エス、そして訪問先やホームステイ先のみなさま、復興レストランマイウスの森谷陽樹氏などから、本企画へのご理解と多大なるご協力をいただいた。学生たちを「育てる」という視点も持ってください、根気強さと厳しくも温かい対応で接して下さった。お世話になった方々のお名前を挙げることができないが、この場を借りてお礼を申し上げたい。

#### 【「かわ旅」同窓会】

10月には、「かわいい子には旅をさせよ」の同窓会を本学白金キャンパスで開催し、かわ旅参加者16名とその保護者の方々が集まった。再会の喜びを分かち合うだけでなく、写真などを通して「かわ旅」をふりかえり、学生による防災意識を高めるためのプレゼンテーションやグループワークなどを行った。

この日は、陸前高田市から田村満氏もかけつけてくださった。子ども達は田村氏のサプライズ登場に驚いたり喜んだり忙しかったが、保護者の方々も熱心に田村氏に話しかけ、陸前高田の状況を聞いたり、自分なりの陸前高田や被災地への想いを伝えていらしたのが印象的だった。

夏休みの「自由研究」として、「かわ旅」で見たことや感じたことをまとめるだけでなく、図書館に行ったり新聞を読むなどの調べ物をしてまとめるなどした子ども達も何人かいた。子ども達への「かわ旅」の影響を知ることができ、学生メンバーたちもやりがいあらためて感じたと思う。

### 【大学生向け「スタディツアー」】

陸前高田での活動を継続するには、1年生を中心とした新メンバーの獲得が不可欠であること、また、子ども達だけでなく学生にも陸前高田の現状を知ってもらいたいこともあり、12月には新たな活動として、1年生を主な対象とした、陸前高田へのスタディツアーを実施した。

13名の学生からの応募があり、学生メンバー5名が引率してバス車内2泊、旅館1泊のツアーとなった。ツアー中は、被災地見学のガイド役を務めてくださった陸前高田市観光物産協会の實吉義正副会長、長洞元気村の村上誠一氏、マイウスの森谷氏などに、夏の「かわ旅」に続き、お世話になった。ボランティア活動として



では、復興サポートステーションのお世話になり、遺留品捜査の震災遺構として残される道の駅タピック45ボランティア活動を行なった。寒い中、足場が悪いところでの作業に、学生たちは、震災後から続く地道な活動への敬意を抱き、「3月11日以前の人々の営み」との糸口を探ることの意義を考えたのではないかと思う。結果として、ツアー後に1年生1名・2年生1名の計2名が陸前高田チームに加入してくれることとなった。これからの活躍を期待している。

### 【2014年度の活動】

2011年3月11日、東日本の広い地域で多くの方の命が失われ、町の風景が変わり、人生が変わってしまった。岩手県陸前高田市では、震災前の人口の7%以上の方が亡くなられたか、いまだ行方不明のまま。津波の被害を抑えるために、沿岸部ではこれから土地の嵩上げが始まる。嵩上げが終わってから建物が建ち、コミュニティの復活には時間がかかるだろう。来年度以降も、陸前高田で生きていく人たちに、関東の大学生や大学のボランティアセンターができることは何か考えながら行動していきたい。

「かわ旅」に参加した子ども達から「陸前高田のために何かしたい」という声があがっている。その声をもとに、学生メンバーが新たな企画を立案中だ。学生メンバーが入れ替わったらすべてをゼロからやり直すことにならないよう、経験や情報、想いを引き継ぎながら、陸前高田での新たな状況に対応できる柔軟さを身につけてもらいたいと考えている。

(中原)

## 「Do for Smile@ 東日本」プロジェクトに参加して

昨年に引き続き気仙沼大島の9月活動に初日から三日間参加した。初日は山手線が人身事故で一時ストップ、慌てて品川駅から池袋駅までタクシーと首都高速道路を利用して、池袋駅23時発夜行バスに乗り込んだ。同行の15名の学生が乗る1便には間に合わなかったが、気仙沼へは不思議と私のほうが早く着いた。朝、熟睡できない一夜を過ごすも自販機からドリンク2本飲み干し、学生の乗るバスを待った。1日目がそんな始まりで漁港までの足取りも重たかった。

昨年とあまり変わらない町並み、望む復興の姿が見えない。生活の場である家屋や工場や作業場など物理的な復旧と何より人の姿が少ないように見えた。観光客より復興支援の人たちか。

参加者それぞれが想いを感じながら大島へ渡り、翌日の敬老会の会場設営と島内の「聴き旅」をした。疲れた体を動かしての設営は辛かったが、島内関係者の皆さんといっしょに指示を受けながら精を出したことは体験としてよかった。会話をしながらわいわい皆で協力しながら設営できたことで満足し、疲れを忘れさせることができた。

午後は、島内散策といった感じで震災と津波で被害を受けた場所を見たり、リーダーから当時の話を聞いたりして愁いが生じた。

3日目は朝早く起床し、大島神社秋季例大祭神輿渡御祭のお手伝い。学生諸君は島の人となりお祓いを受け、島内の3ヶ所の奉納の場まで神輿を担ぎ、島の人といっしょに楽しんだことで、多分、深く思い出に残る場面をつくったと思う。



秋季例大祭神輿渡御祭の様子

その後の敬老会。初めて身をおく事になったが、元気な高齢者を見て、励ますお孫さんの作文を聴いて、いいじゃないか。敬う心、家族思いが実は復興の原点に想われた。これから、幾年掛かるかもしれない復興は若い世代が引き継ぐことになろう。

ボランティア活動として参加したのだが、なんとなくその言葉が私から薄れてしまった。判らんが、最後に敬老会の案内パンフに気仙沼市民憲章が印刷されていたので読み上げる。

1. 自然を愛し、海と緑の美しいまちをつくります。
2. 心とからだを鍛え、健康で明るいまちをつくります。
3. 働くことを喜び、産業の盛んなまちをつくります。
4. いたわり、助けあい、きまりを守って安全安心なまちをつくります。
5. 学ぶ心を大切に、文化の香り高いまちをつくります。



大島最高峰亀山から見た気仙沼湾

あまり接する機会がない市民憲章。素晴らしい。

(学生サポートセンター 松下政光)

## (2) その他の災害支援

## 伊豆大島～学生による報告～

### 【第1クール活動】

活動期間：11月16日（土）～17日（日）

参加学生：5名

### 【活動内容】

依頼内容は、白井さんと土屋さんのお宅の床下の泥出しであった。明治学院の5人と波多野さんと一般の方の総勢15人で活動をする。活動はリーダーの指示によって行われた。まず、畳と床をはがし、泥をあらわにした。そしてスコップ係がひたすら表面の泥を取り出した。このときあまり深く掘りすぎると柱の基礎が出て家全体が不安定になってしまうため、時々リーダーの指示を仰ぎながら行った。そのかき出した泥はみの（砂などを運ぶための道具）係が外に運び、一輪車（通称：ねこ）に泥を入れ下の泥の廃棄場所に持っていった。

1日目の午後も引き続き作業が行われ、床下にもぐって泥をかき出す作業も行った。しかし次の日は午前には活動ができないという人が多く、午前よりも少ない人数だったため作業が大変になったように感じた。懐中電灯で照らしシャベルで掘る作業を行い15時半にキリのいいところまでの泥出しを完了させた。また、翌日雨が降る可能性があるとして外に出した家具をすべて雨の当たらないところへ運んだ。

2日目の午前も引き続き同じリーダーと同じ現場で作業することになった。一般の方は日曜とあってか、1日目よりも多く参加されていた。作業は1日目とは違う部屋の床下であった。そこでは泥が固く作業は1日目よりも進行が遅かった。

そして作業の後半は社協の方の指導のもと、泥を出したあとの臭いや酸化を防ぐために石灰をまき、この日の午前中の作業は終了した。昼食を食べる前に社協の方に現地の状況を教えてもらい、現場を見て回った。

### 【感想】

今回の活動ではリーダーのリードにより、全体的にスムーズに作業ができた。今回は緊急支援であったので作業のスピードが何よりも求められている活動だと感じた。今回のボランティアが初めての人もいれば、東日本のボランティアを経験している人もいる。それぞれが、1日目を通して、新鮮な意見を持ち合わせていたため、初日のミーティングでは反省すべき点のほうが多く出た。大きく分ければ、受け身的なボランティアであったこと、周りへの意識が欠けていたことである。特に初日はコミュニケーションが取りづらく、そのことで、被災者がどのくらいのボランティアを求めているのかがあいまいに

なる。また、ボランティアされる側の気遣いの意識が強すぎて、まるでボランティアする側がされているかのような状態に陥ってしまう。今回のような活動では、あくまでも作業が中心であり、その中で被災者の振る舞いに沿った最低限のコミュニケーションをとるという意識で取り組むべきとの反省がなされた。その反省を生かし2日目は活動できたことでよりよい活動ができたのではないかと思う。

5名の参加学生の活動参加後の感想もそれぞれさまざまなものであった。

「多くの一般のボランティアの方々の参加や、大島の方々のおもてなしなどに人の暖かさを改めて感じる活動となった。」

「まだまだ自分は子どもなのだと認識させられた場面も多かった。この想いを胸に、もっといろいろな人を助けたいと思った。」

「町にあふれる笑顔を見ると、被災前に島を離れた罪悪感を忘れて、私も頑張らなければと思った。」

「それなりに危険が伴う現場で、初対面の人々と作業をするという状況下で、いかにリーダーが重要で、責任の重い役割か、その指示の的確さやメンバーへの気配りなどを見て実感した。自分が今までやってきたボランティアとは全く違う次元のボランティアを見た気がした。」

「現在の状況から復旧完了した状態までを想像したとき、今、どの段階にいてどの作業を優先するべきなのか。それらについてその場で判断していく力がかなり求められる活動だと思わされた。」

今回の伊豆大島の活動は緊急支援であり、被害の甚大さを肌で実感した私たちがそれを他の人に伝えていくこと、今回の経験を無駄にしないことが大変重要であると思う。そして、4人の行方不明者、被災者の心の傷、伊豆大島が負った多くの傷が少しでも早く治ることを願うばかりである。



活動前のミーティングの様子



作業中の様子

(学生メンバー 社会学部社会学科4年 内田俊治)

## 【第2クール活動】

活動期間：11月23日（土）～24日（日）

参加学生：10名

## 【活動内容】

第2クルールの学生が行った活動内容は、2日間とも被災された2宅の清掃作業であった。床下の泥出しも一部分は行ったが、大部分の泥出しはすでに終了しており、柱や壁についた泥をブラシで磨く作業や、家の周辺に取り残された土砂の運搬などを行った。これらの作業は明治学院の学生10人と一般のボランティア参加者、地元の海洋高校の高校生とともに約30名で行った。また作業の合間には被災された方のお話を聞いたり、社協の方からは被災状況の説明を受けたりした。

## 【感想】

今回の活動では、以前に観光で大島を訪れた学生が数人いたが、皆被害の大きさにショックを受けた。災害から約1ヶ月が経過していたとはいえ、いまだに骨組みだけの家や積みあげられた土砂があり、被害の爪痕を感じた。皆テレビの報道では被害の様子を見ていたが、あまり実感がわいていなかった。しかし実際にお宅の清掃を行う中で、家具や文房具などを見つけるたびに、ここに生活があったのだということを実感した。

活動中での気づきは「作業を丁寧に行う」ということであった。当たり前のことのように感じるが、初めてその場で出会う人とともに作業を行う中で、この点は難しかった。まず作業中は、人とコミュニケーションをとることが必要であり、コミュニケーションをうまくとらないと作業はスムーズに進まない、また単純作業であると、自分の作業に必死になってしまい、周りが見えにくくなってしまう。また掃除を行っている場所はたとえ、今現在は生活を続けることが困難な状態に見えたとしても、人の生活があった場所であり、誰かにとっては大切な場所である。そのようなことを社協の方のお話や、実際に活動を行うことで、考えることが多かった。第2クールは「作業を丁寧に行う」ことをまずは徹底しようというメンバー内で話し合い、活動を行った。

作業の合間には、作業を行ったお宅の方と話す機会もあり、災害当時の話、復旧作業の様子、大島の暮らしなど、たくさんのお話を聞かせていただいた。また作業の休憩時間には地域の方がてんぷらや豚汁、おにぎりなどをふるまってくださり、おいしく頂いた。ボランティアをする人とされる人だけの関係ではなく、たとえそれが一瞬でも、さまざまな話ができたことは良かったのではないかと思う。私たちも話を聞くことで、よりいっそう「大島の力になりたい」と思うことができ、また大島の人々の温かさに触れることができた。やはり、「実際に人と出会って話を聞くこと、そばにいること」は本当に大切なことであると実感した。しかし同時にこれから、島外ボランティアの受け入れは終わり、高齢化が進

む島では、これからの被災された方の心のケアはどうなるのだろうと考えると、考え込んでしまう面もあった。

作業の他には、社協の方に土砂災害の起きるメカニズムや実際に土砂災害の被害が大きかった地域で、災害の説明なども行っていただいた。一部の地域は車から見受けられる限り集落の痕跡はなく更地状態であった。依然、行方不明者の搜索活動は続けられており、ところどころに旗や花束が添えられていた。この光景は忘れることができない。同じ大島の中であって同じ台風による土石流が原因であっても、被害の出方や大きさは立地によって大きく異なるということが実際に目で見てわかったことである。私たち学生ボランティアのできることとできないことの境界線というものも実感した。崩れた川縁や家々の塀などいたる所に土嚢が積まれていたが、もともと大島では土嚢を積む習慣はなかったため効果的に積まれていないところもあるという。実際の被害状況を一部ではあるが知ることができた。

私たちが今回の活動で学んだことは、やはり現地に行かなければ、わからないことがあるということである。今まで大島は自分にとって遠い存在であったが、今回のボランティア活動で近い存在になった。また大島を訪れたことのあるメンバーも、大島がさらに自分にとって思い入れのある島に変化した。メンバー間の話し合いでは、「今後も何かしら大島に関わっていきたい」「ボランティアでなくても、観光として訪れたい」「今後島外のボランティアの受け入れは打ち切られるが、その後被災した方の生活はどうなるのか、考え続けたい」「今回の感じたことを自分の周りに伝えたい」「大島では土砂崩れを想定しきれていない面があった。実際に自分が住んでいる地域はどうなのか調べてみたい」などの意見が出た。私たちは、実際にこの災害が自分と関係のないものではなく、このボランティアのその後も考えるようになった。今回のボランティアはたった2日間の短い期間であり、私たちが大島でできたことは、本当に少しである。しかし、今後、一人ひとりがどう行動していくかを考える大きな2日間であった。

そして最後になったが、大島の日も早い復興を願うとともに、人々が負った心の傷が一日も早く癒されることを願いたい。

(学生メンバー 国際学部国際学科3年 生田みずき)

## 伊豆大島～活動をふりかえる～

10月16日(水)未明に伊豆諸島を通過した台風26号は前線の活動と相まって、東京都、千葉県、茨城県の14の観測地点で過去最大の24時間雨量を観測した。なかでも伊豆大島では1時間に122.5ミリもの集中豪雨となり西部で土石流が発生し、多くの建物に被害をもたらした。自衛隊、警察による復旧作業や行方不明者の捜索が行われたことは、連日の報道で記憶に残っている方も多であろう。大島を支援しないのかという学生の声ボランティアセンターに届いた。当初大島では災害発生後しばらくは公には島外からのボランティアを受けずに活動を行っていた。

しばらくして宿泊場所と交通手段を確保すれば島外からのボランティアを受け入れるとの伊豆大島社会福祉協議会ボランティアセンター(以下大島社協)の方針転換があった。10月30日(水)に株式会社JTBコーポレートセールス(以下JTB)より、地域の要請に応えるためにボランティアツアーを企画するとの連絡が入るとともに、東海汽船の割引が始まるなど明治学院大学の学園祭(白金祭)期間中にボランティア受け入れ態勢が整う。ボランティアセンターミーティングで協議の結果、授業に支障の出ないJTB提供の11月15日(金)と22日(金)の夜に出発(いずれも日曜日夜に戻り)の東海汽船フェリーを利用したボランティアツアーを利用して支援活動を行うことを決めた。ポートヘボンで参加学生を募ったところ、早々に15名の学生から応募あり、JTBとはツアーでなく明治学院大学単独のプログラムとして契約した。初回は現地視察を兼ねて引率者をつけた。

作業は学生による活動報告のとおり、第1回は床下の泥かき主体で文字通り肉体労働であった。我々は正味一日半の活動で疲れ果てた。高校まで現地で生活した参加学生の被災前後の光景の違いの語り口は被害の大きさをより鮮明なものにした。活動が無理なく行えたのは小さな組織の大島社協に複数の明学関係者が所属していたことが大きい。第2回の活動は支援を必要とする家屋の作業としては終盤に差し掛かっており、家財用具の整理や窓枠にこびりついた泥を刷毛で取り除くといった作業も加わった。

活動は東日本大震災復興支援活動をきっかけに作成した黄色いビブスを着用して行った。これは不特定多数のボランティアが活動する中で、身元を明らかにする意味合いのものであった。しかし、非常に目立っていた様子で、休憩中に複数の支援団体より白金キャンパス周辺での防災活動の打診を受けた。このことがきっかけとなり、趣旨に賛同した一部の学生が早くも授業に支障の無い範囲で白金地域での活動に参加している。

現在は支援を必要としていた方への手当てが進んだことにより、大島社協では島外からの個人ボランティアは受け入れていない。フェイスブックを見る限りでは島民の手により平日にサロンを開設するなどの活動を行っている。支援活動は緊急から復興の段階へと歩みはじめたものと判断できる。今後の活動については現地の状況による。末筆で恐縮だが、お世話になった大島社協とJTBに感謝を申し上げる。

(波多野)